



四日目の朝。

扉に寄りかかって眠っていたのに、いつのまにか床に寝転がっていた。

雨が止んでいることに気がつき、ちょっとだけ痛い体を起こして外へ出る。

ふもとにつながる唯一の道が、土砂や倒木でふさがっていた。

急いで小屋に戻り、ドアをノックした。

「やっぱり土砂崩れでした」

「そっか」

「どうしよう、困ったな」

それは、小さな独り言だった。

扉から離れ、いつものように朝ご飯を作ろうとしたとき、背後で音がする。

ゆっくりと扉が開いていき、中から——やせ細った男性が出てきた。

「スマレ……？」

「スマレじゃなかったら、僕は誰なんだろうな」

「ふふ。——やっと、顔が見られました」

「お互いにね」

スマレが少しだけ口角をあげて言う。

その様子に、私もつられて笑ってしまうのだった。





◆

マリーと並んで道を確認する。

「開通には時間がかかりそうだ」

「幸い、数日過ごすだけの食料はありますが……。こんな山奥だと誰も気づかないかもしれないですね」

「撤去は僕がやる。部屋と食事の恩を返させてほしい。この道がふさがっていたら、困るだろう」

「……はい、困ります。でも——」

「ああ、心配しなくてもこれを片づけたら出ていくよ」

「そうじゃなくて！ この量を一人でやるんですか？ 絶対に無理です。倒木だって混ざってるし」


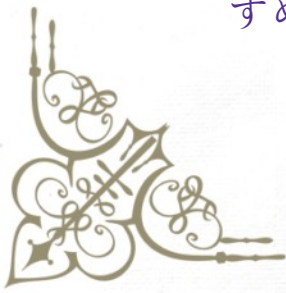
「肉体労働は得意なんだ」

そういうと、心配を込めた瞳でじっと見つめられた。  
僕はため息をつき、土砂崩れに向かって歩いていく。  
そのまま手前に転がっている倒木を掴み、力任せに引きずって端に寄せた。

「ほら、なんとかなる」

「スマレ！ さっそく手にけがしてますよ！」

倒木を無理やり引きずったことで、折れた枝が手の甲をかすめたのだろう。







赤く線が引かれ、少しだけ血が流れた傷は——すぐに消えてなくなった。

「……あれ？ たしかに傷があったのに」

「君は中に戻っていて。できれば、あのスープをつくってほしい。作業終わりに飲めたらうれしいから」

「スープは作りますけど！ そうじゃなくて、傷は？ それにその筋力、ふつうじゃないです」

「……僕は。僕は、そう、ふつうじゃない。魔法をかけられたから」

「どういう、ことですか」

ざあ、と木々が揺れる。

戸惑いをみせるマリーから、僕は、視線を逸らした。





「僕は作業に移るよ。危ないから君は小屋へ戻っていて」

そういうと、マリーはいまだに戸惑いをみせていたが、早足で小屋へ戻っていく。

魔法がかけられた人間なんて気味が悪いよな。





朝も昼も食べずに、夜までずっと撤去作業を続けていると、  
マリーが夜食を持ってやってきた。  
なんだか、怒っているようだ。

「せめて夜ご飯は食べてください！」

「わかったよ……」

「スープ作って待っていたんですよ！」

「ごめん」

「謝るなら食べてください」

「……うん」

彼女の力強さに押され、僕はその場で夜食を食べた。

「まだ、やるんですか？」

「もう少しだけね」

「私もなにか手伝いましょうか？」

「眠ってていいよ。うるさくしないように気をつけるから」

「……せめて休憩はとってくださいね。入ってすぐのテーブルに果物がありますから食べてください。それじゃあ、おやすみなさい」

そして、マリーは小屋へ戻っていく。

小さな背を見届けたあと、作業を再開させたのだった。

